



素盞雄神社に保管されている芭蕉の句碑＝荒川区南千住6丁目

奥の細道で松尾芭蕉の旅立ちの地となったのは南千住？ 荒川区がそんな仮説を立てて、旅の最後の地となった岐阜県大垣市との交流を計画して

いる。北千住のある「本家、足立区は静観の構えだが、「この機会に二つの千住がにぎわえば」との声も出ている。
(古源盛一)

荒川区 PR へ 催し 本家の「共に」エール 北千住

芭蕉の記述に、荒川ふるさと文化館副館長の野尻かおる総括学芸員はこう推理する。「当時、大川（隅田川）を渡ればもう江戸ではなかった。一大決心して旅立つ芭蕉は、南側から千住大橋を一步一步踏みしめ、江戸を振り返りつつ渡ったのではないでしょうか」

千じゆと云所にて船をあげれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそぐ。
行春や鳥啼魚の目八泪（奥の細道から）
芭蕉の記述に、荒川ふるさと文化館副館長の野尻かおる総括学芸員はこう推理する。「当時、大川（隅田川）を渡ればもう江戸ではなかった。一大決心して旅立つ芭蕉は、南側から千住大橋を一步一步踏みしめ、江戸を振り返りつつ渡ったのではないでしょうか」

千住論争 奥の細道起点 「南」も名乗り

推理の根拠は二つある。荒川区側の東日暮里には黒羽藩（現・栃木県大田原市）の下屋敷があった。同藩には芭蕉の弟子が2人いて、旅の中で芭蕉が最も長期間滞在した。事前にあいさつに訪れても不思議ではない、という。

周辺で最も古い芭蕉の句碑も素盞雄神社（南千住6丁目）にある。1820（文政3）年建立集まる「芭蕉サミット」

一方、対岸の足立区でもこの数年、「芭蕉」で盛り上がった。昨年、全国のゆかりの自治体が集まる「芭蕉サミット」

で、北千住にあるどの句碑より古い。「当時の人々は南千住側と考えていたとも考えられます」と野尻さん。
区では来年、千住大橋の企画展を開く準備を進めている。その際、芭蕉コーナーを設け、大垣市で盛んな俳句のイベント「俳句相撲」の荒川場所を開催する。同市の児童にも参加してもらい、区内の児童と句作を競わせる計画。8月末には西川太郎区長も同市を訪問し、交流を呼びかけた。

原さんも「千住は元々一つの宿場。両区が一緒に盛り上げてほしい」と、「南」の取り組みにもエールを送っている。